
お帰りはこちらへ

背黄青

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

お帰りはこちらへ

【Nコード】

N0248V

【作者名】

背黄青

【あらすじ】

ここは死者の世界。ちがう。死にかけたものの、まだ生きることが出来る見込みのある者が一度来る場所。

そこで、ただ一人、自分も逝ける日を待ちながら人を導く少年のお話。

ブログに載せたものを大幅修正して転載。

1人目　お帰りはこちらへ

真っ白な空間　境目の無い空と地面

風の無い、音も、何も無い空間

ここは、あの世とこの世の境目・・・とても言つべきだろうか。

三途の川だとか、そんな風に言われる所。

僕はここで、死ぬ運命では無かった人の魂を、元の身体みづみづに帰す案内人案内人をしている。

僕も、死ぬ運命ではなかった。

けれど、もう帰る身体みづみづは無いから、あの世へ逝ける日を待ちながら、こうして案内人案内人をしている。

自らあの世へ逝く事は出来なかった。何度も試したけど、ダメだった。

いつになったら、僕は向こうへ逝けるんだろう・・・

あ、人が来た。

2人目　疑問だらけの仮死

・・・ここは・・・？

俺は・・・確か・・・そうだ、事故に逢って・・・。

ああ、俺は・・・死んだのか？

もう少し・・・生きたかったなあ・・・

あいつは、俺の帰りを待つてるだろうに。
ん？あそこに居るのは、お迎えだろうか？

知り合いで死んだ奴・・・両親共々元気だしなあ・・・あ、こっち来た。

「貴方は・・・死ぬ運命では無い人。まだ、間に合います。さあ、お帰りはこちらへ。」

差し伸べられた手。取るべきか？よく考える。

死ぬ運命ではない・・・？生き返れるのか？

間に合っつてことはそうなのか？それとも、まだ死んでなかったのか？

じゃあ、ここはどこなんだ？・・・だめだ、疑問しか出てこない。

「君は・・・？」

とにかく、何か聞くにはお互い知り合わないと・・・どうにも・・・。

「・・・ほら、早く帰りなさい。」

なっ・・・話噛み合ってねえ！

見た所・・・普通の男の子だが・・・

真っ白な、簡単につくりの服。黒っぽい長ズボン・・・。

変な所といったら裸足なくらいか・・・？見た目は。

「なんで・・・そんなに急かすんだよ。」

まあ、この際こいつの正体はどうでもいい。

「身体が減びてしまう前に帰らないと、帰れなくなってしまうから。」

・・・冷静だな。

帰れなくなるのは嫌だな。帰るか。

「さあ、こちらへ。」

「ああ、ありがとう」

そう言っつて俺は帰りの門の前に立つ。

あ、そうだ、あいつは・・・
「なあ、君は一体・・・」

いない

さつきは居たはずなんだが・・・
まあいい、帰ろう。

3人目く自ら絶ったく

私は・・・そうか、死んだのよね。
良かった。ちゃんと死ねたんだ。
手首痛かったけど・・・もう、平気よね。
あら？あそこに居るのは・・・誰かしら？
また、私を苛める奴だったら嫌だなあ・・・。

「貴方は・・・まだ死ぬ運命では無い人。まだ、間に合います。さあ、お帰りはこちらへ。」

差し伸べられた手を、軽く叩く。

「嫌よ！もう生きていたくなんか無いの！」

「え・・・？」

驚くわよね。多分。

だって、帰れるんだったら帰りたいてって人の方が多いだろうし。
でも私は帰らない。もう苛められるのは嫌だ。

ああ、こんな事なら飛び降りれば良かったかな？そしたら完全に死ねたのかもしれない・・・。

「ダメです！！帰らないと！！じゃないとあの世にも逝けないんですよ！！！」

あの世にも逝けない・・・？
いいもん、べつに。

だって、あの世には、私の嫌いな奴だっけきつと来る。
だから嫌だ。もうどうでもいい。

「輪廻の中にも、入れないんですよ？」

生まれ変わりなんて、望んでない。

「ほら、行きましょう！」

っ・・・！手を引つ張らないで・・・！！

やめて・・・！もう苛めないで・・・！

嫌・・・嫌よ・・・もう嫌！！

「やめてっ！！！」

手を振り払って逃げた。逃げるしか出来ない。

お願い、追ってこないで。

「あつ！そつちは・・・！！！」

え・・・？

足元に広がる町の景色。

見慣れた町。見慣れた学校の屋上。

落ちる

落ちる

落ちる

・
・
・
-
-
-

4人目く優しい思い出く

まだ・・・あの音がうつすら残っている

わしは・・・死んだはずなんだがなあ・・・

真っ白・・・ここは、黄泉の国か？

浄土へ逝く事は、出来たんかいの？

おや？あそこに居るのは？

少年のようだが・・・誰かの？

「貴方は・・・まだ死ぬ運命では無い人。まだ、間に合います。さあ、お帰りはこちらへ。」

差し伸べられた手。力の無いわたしにはもう、握れないだろう。

そして、もう、帰る気も無い。

「いや、わしはもう、帰らんよ。」

「何故ですか？帰らないと、あの世にも逝けないんですよ？」

「おや、そうかい。すまないねえ、わたしにはもう、難しいことは分からないのじゃ。」

悲しげな目で見つめられた。孫を思い出す。

「すこし、話してもええかの？」

「・・・はい。」

少年の隣へ行き、話す。

孫との思い出。何れ、消えてしまいかもしれないから。

「お前さんは、わしの孫に似とる。懐かしいのう、こうして、一緒に並んで川原を散歩したりして・・・。もう、たとえ生き返ってももう、あの子と歩く事はできんのじゃよ。身体はもう動かなくなつとるから・・・。この先、老い先短い命。このままここに居るのも悪くは無い。そう思うんじゃよ。すまんのう・・・迷惑かの？」

「いえ・・・もう・・・いいです。」

手のほうを見つめている・・・？手に何かあるのか？

あ・・・手が、透き通つとるな。そうか、逝くのか。

「ありがとう。わしの話を聞いてくれて。」

「いえ、それで幸せなら、幾らでも聞きますよ。」

「・・・ありがとう」

5人目ゝすてられた？ゝ

めがさめたところ。知らないところ。

ここはどこだろう？ぼくの知らないでしょ。

なんにも知らない。わからない。

あれ？こつちにくるのはだれだろう？

「あな・・・きみは、まだ知らないんだよ。きみがいくのはこつちのみち。つれてつてあげるから、いっしょにいこう。」

ぼくは、このひととてをつなげばいいのかな？

よくわかんないまま、おにいちゃんとてをつないだ。

「ねえ、どこにいくの？」

きいてもいいよね？わかんないから。

「かえるんだよ。もとのところに。」

「もとの・・・？」

知らない。

わからない。

「おかあさんのところだよ。」

おかあさん？

知らない。わからない。

おかあさんつてなに？もとのところつてなに？

こわい。また。まただ。ねえ、また、また”すてられる”の？
いっこだけ、わかったもの。しってるもの。

“すてられた”いらないうっていわれたこと。

いやだ。いやだ。いやだ。

「・・・いやだ。”すてられる”のはいやだよ・・・」

「・・・だいじょうぶ。」

え・・・？

「きみのからだは、やさしいひとにひろってもらったから。」

わからない。でも、わらってるからいいことなのかな？

「なかないで。だいじょうぶだよ。きつとたくさん、たくさん、たのしいことがあるから。」

ぼくはないてた。おにいちゃんはなぐさめてくれた。

おにいちゃんも、ないてた。

だからぼくはないうちやいけな。

「・・・うん。」

いつのまにかおっきなドアのまえ。このむこうに、たのしいことがあるの？

「さ、いっておいで。きつとむこうはたのしいから！」

おにいちゃんがわらいながらいう。

だから、ぼくもわらった。

「ありがとう！おにいちゃん！」

あれ？

おにいちゃん、もういないや。

また。ひとり。

でも、このむこうに、いいことあるよね？

たのしいことが、あるんだよね？

・・・いつてくるね。

1人目〱待ち続ける〱

僕は、もう何人案内しただろう？

男の人、女の人、老人、子供

僕は、何時になったたらあの世に逝けるのだろう？

逝きたい。帰りたい。

どっちもあるから？だから、どっちにも行けないのかな？

寂しい。悲しい。ああ、他に同じ人は居ない。

皆、皆、帰しているから。

あの世に逝った人。彷徨う人も居たけど、ここに残った人は、他に居ない。

僕一人。

僕は、ずっとずっと一人で、あの世に逝ける日を待ち続ける。

おや、また死ぬ運命では無い人が来た。

また案内しないといけないな。

「さあ、お帰りはこちらへ。」

（後書き）

くあとがき

かつて短編をノリノリで書いてたときのものですw
5人目が一番難しかったので至らない点が多いですがまあ・・・その・・・スミマセン

それでもここまで読んでくれた方には感謝します。
ありがとうございました！

ではっ！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0248v/>

お帰りはこちらへ

2011年10月9日12時26分発行